

第7章 25～34歳未婚女性における結婚観からみられる 家族観と将来展望——就労をめぐる語りの分析から——

府中明子

FUCHU Akiko

1 はじめに

本稿では、結婚適齢期である25～34歳の未婚女性たちのインタビューデータの分析を行い、特に女性について結婚と競合していると言われる就労についてどのように今後を展望しているのかについて、考察する。

現在、未婚・晩婚化は社会問題とされ、広く認識されている。その中で、話題になるのは未婚で就労している女性たちについてである。目黒は、近代化によって女性が経済的に自立可能となったことの帰結として、未婚・晩婚化が引き起こされたと述べた(目黒1991)。確かに女性が雇用されて働くことは、戦後大幅に増加したことは間違いないだろう。ただし、ごく最近についてのみ言えば、雇用就労者は増加しているものの、正規雇用者は減少し、非正規雇用就労者が女性において大幅に増加している(国立社会保障・人口問題研究所2013)。非正規雇用化は男女ともに起こっていることであるが、自営業が多かった男性と比較して、女性は1980年代頃から正規雇用での就労者が多かったため、非正規雇用化が進んだのは女性においてより急激であった。そして、すべての年代において、男性よりも女性の非正規雇用就労者が多い。そのため、女性が正規雇用で就労し続けることは、男性のようには当然とみなされにくかった。

現在、結婚後、第1子出産後に離職する女性は未だ多い。結婚から第1子出産までの平均期間は2.26年であり、妊娠・出産というイベントが結婚後にあまり期間を置かず起こっていることがわかる(厚生労働省2011)。結婚前から出産後までの就業状況の変化については、厚生労働省「第10回21世紀成年者縦断調査」によると、結婚前に仕事ありの女性(農林漁業を除く)の36.0%が、第1子出産を機に離職しており、「第1子出産は女性が就業を中断する大きな要因となっている」と分析されている。平均初婚年齢が29.3歳であり、また女性の結婚行動は30～34歳の間で最も起こりやすく、35歳を超えるコーホートでは女性の7割以上が既婚者となる(厚生労働省2013;国立社会保障・人口問題研究所2012)。以上を踏まえて、現在結婚適齢期とされる年齢は、女性では25～34歳であるとみなしてよいだろう。2016年現在、25～34歳コーホートの女性たちは1981～1990年生まれである。改正男女雇用機会均等法が施行された1997年時点で16歳以下のひとであり、就労に際して法の上では男女平等の恩恵を受け始めた世代である。

本稿では、女性への結婚観に関するインタビューを通して、その中で登場した将来の就労状況に関する発言を分析し、結婚観や家族観が就労とどのように関連付けられて語られ

ているのかを考察する。それに注目することによって、女性たちにとって、自身の就労がどのように位置づけられているのか、結婚を決定する際に就労状況が競合するのかどうか、競合するならばどのようにしているのかをみることができると考える。インタビューの分析に際しては、レトリック分析⁽¹⁾を参照し、語り手自身の経験や解釈と、それに基づく展望を聞き取り、分析する。

2 先行研究

2.1 女性の就労状況と結婚意欲

未婚の女性は、仕事か結婚かを天秤にかけて悩むはずであるというイメージをもたれやすい。つまり、女性は結婚や妊娠・出産に際して仕事を辞めることが自明であるとする考え方が根強く存在しており、女性が「仕事を続けたい」から「結婚しない」あるいは「結婚を先延ばしにしている」のではないかという見方がなされる場合がある。しかし、国立社会保障・人口問題研究所の調査によれば、18～34歳女性の結婚意欲は、学生を除き、就労形態とは関連がなかった（国立社会保障・人口問題研究所 2012）。またこの調査において、「一年以内に結婚してもよい」と考える未婚女性は、学生を除けば、割合の高い順に自営・家族従業等で 75.4%、派遣・嘱託で 65.3%、正規職員で 64.8%、無業・家事手伝いで 64.1%、パート・アルバイトで 60.9%であった（図 1）。結婚意欲は全体的に高水準である上、いわゆる「安定」した仕事である人の方が、不安定と言われる非正規雇用や無業の未婚女性よりも、結婚意欲が若干高い結果となっている。結婚意欲を規定する要因として、女性よりも男性において、その就労状況によって差がみられた。つまり、データからみれば、「安定」した仕事をしている女性は結婚を先延ばしにしておらず、すぐにでも結婚したいという人びとはわずかながら不安定な仕事をすると言われる人びとよりも高い水準で存在することがわかる。

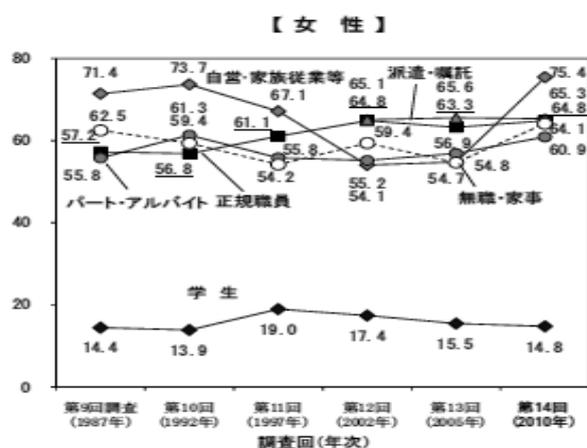


図 1 調査・就業の状況別にみた、一年以内に結婚してもよいと考える未婚者割合の推移（国立社会保障人口問題研究所「第 14 回出生動向基本調査—第 II 調査—」図 1・3 を引用）

では、なぜ女性の仕事が結婚と競合していると言われるのであろうか。国立社会保障・人口問題研究所の調査では、女性に対し理想／予定するライフコースを、男性にはパートナーの女性に望むライフコースを質問している（国立社会保障・人口問題研究所 2012）。そこでは、過去 10 年ほどの調査の間、女性が理想とするライフコースのうち、専業主婦は微増しているが、3 割水準にとどまっている。非婚就業についても、6 割水準を保っており、大きな変化はみられない。両立、再就職についても、6 割水準、5 割水準から大きな変化はみられないと言える。変化が起こっているのは、男性による女性に望むライフコースのほうである。女性に望むライフコースは非婚就業が 1997 年の 41.2%から大幅に減少し、2010 年の第 14 回調査では 27.8%となった。増加の傾向となったのは、それ以外の DINKS、両立、再就職、専業主婦である。特に顕著なのは、1997 年時点での 34.0%から 53.0%となった再就職と、同時期に 47.4%から 64.8%に増加した専業主婦である。この数字をみれば、女性が就労と結婚の間で葛藤しているのではなく、女性に仕事を辞めてほしいと考えている男性が急増していることがうかがえる。女性の持つ仕事が、男性にとって望む結婚後の生活の妨げとして受け止められているため、仕事を持つ女性に対する風当たりが強くなっているのではないだろうか。しかし、その点についてはまた稿を改めたい。本稿では、女性は結婚というイベントを経て、どのような生き方を展望しているのだろうかという点について注目する。

2.2 ライフコースからみた女性の生き方

嶋崎は女性のライフコース研究の視点から、戦後日本ではライフコースの制度化が進んだと論じている（嶋崎 2013）。日本におけるライフコースに関する制度として、社会保障体系、企業中心主義、標準家族世帯モデル、教育と労働市場の連結の 4 点を挙げ、それらがサラリーマン男性のライフコース・モデルと専業主婦のライフコース・モデルという 2 つの、人びとに望ましい「公的ライフコース」を制度として用意したといえると嶋崎は述べている。これらの「公的ライフコース」を人びとが実際にたどっていくことをライフコースの標準化と呼び、戦後日本では 1970 年代に専業主婦は急速に拡大し、1980 年がサラリーマン世帯における専業主婦世帯率はピークとなった。現在でも、出産一年前の女性の有職の割合が 54.3%、であるのに対し、出産半年後は 25.1%である（図 2；厚生労働省 2015）。常勤の者は 32.8%から 16.2%に減少し、パート・アルバイトの人びとは 15.9%から 3.5%に減少している。その他の割合が 5%ほど存在するが、この数字からは、育児休業を取得して就労を継続している女性は母親全体に対して 2 割に達しない可能性がうかがえる。この結果はあくまで出産後の就労形態についての調査によるものではあるが、結婚後のほとんどの夫婦が子どもを持つことを想定している現代日本社会において、この結果が結婚後の女性の生き方を表しているとみることができるだろう。

標準化したライフコースは現在もあまり変わったようにはみえないが、しかし標準化が

進んだ直後、1980年代にはもう「多様化」という言葉が登場している。一定水準以上を求め均質化が進んだが、その水準が達成されたため、差異化を求める動きが登場したと嶋崎は論じている。しかし、ここでの「多様化」はあくまで標準のモデルを温存したまま周辺の代替的選択肢が多様になったことが想定されていた。ここから、「多様化」が主に周辺の存在である女性に起こったことも、現在でも結婚後の就労状況について、ライフコースの標準化以降ほとんど変化がないことも、一貫していることがわかる。

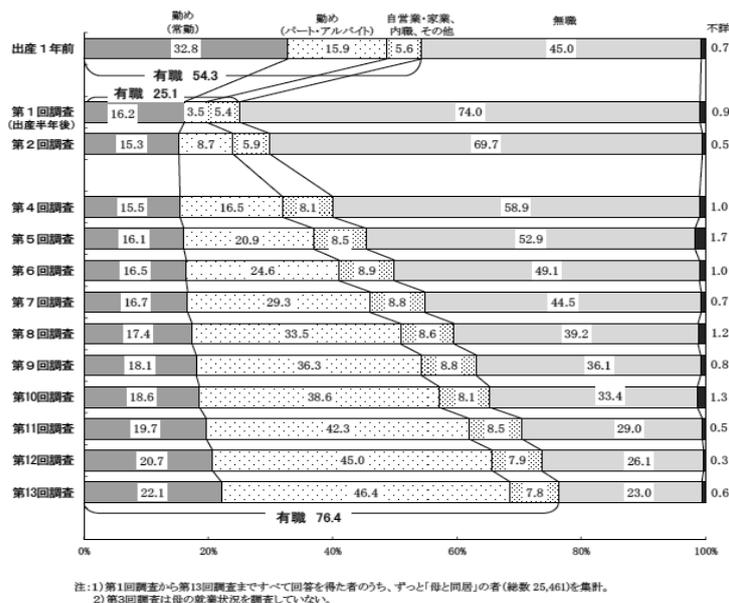


図2 母の就業状況の変化

(厚生労働省 2015 「第13回二十一世紀出生児縦断調査」 図1 より引用)

2.3 先行研究からみた本研究の意義

女性の結婚と仕事について、先行研究では統計調査によって意欲の傾向や動向へのアプローチがなされ、ライフコース研究によって制度的側面と女性の動向とが検討されてきた。ライフコース研究において、女性の生き方の多様化が指摘されているが、しかし統計調査では、女性の結婚前後の生き方やそれに関する意識が、1980年代以降目立った変化が見られない項目も多い。女性の生き方についての変化や新しさについて、話題に上りやすいが、その実態は既存の統計調査による研究では見えにくい部分もあると言えるだろう。女性の就業について、結婚や出産をする前に理想/予定するライフコースとして語られる生き方が、実際には女性自身によってどのようにして想起され、どのような文脈で語られるのかについての研究の蓄積はまだ決して多くはない。インタビュー調査で得られたデータを分析することによって、調査協力者それぞれの語りのレトリックを追うことが可能となる。これから結婚するつもりの方たちにとって、仕事と結婚や家族がどのように位置づけられているのかをみることによって、結婚や家族が人びとにとってどのようなものであるの

かについて研究を進める端緒となり得ると考える。

3 調査の概要

本稿では、半構造化インタビューのデータを用いて、語りを分析し、考察を加える。

1) 調査期間と調査対象者

調査期間は2014年7月から11月までである。調査対象者は、首都圏に住まい・職場・学校のある25～34歳の未婚女性である。

2) 調査項目、調査方法

本稿に関わる調査項目は、結婚後の仕事に関する将来の展望についてである。その質問に回答した協力者のうち、結婚後、子どもを持つつもりがあり、かつ仕事について回答した5名のインタビューを分析した(表1を参照)。調査対象者は、筆者の知人からその知人を紹介してもらいスノーボール・サンプリングによって募り、協力者を得た。半構造化インタビューを実施し、調査協力者に許可を得て録音して、トランスクリプトを作成した中から、6名分を採用している。協力者一人につき一回ずつ、一対一の面接を行った。一回の面接の所要時間は60～90分間である。

調査対象者のサンプリングについては、偏りが生じるなどの批判があるだろう。しかし、本稿の目的である特定の対象者を集める上で、有効な手段であると考えられる。今回の分析は会話のレトリックを分析することであり、ある程度共通の文脈を用いる人びとの語りを分析することで、現代の日本において、結婚後の仕事に関する女性のライフコースに関する展望の一端を明らかにすることができると思われる。

本調査でのインタビュー協力者たちは、いずれも結婚したい、あるいはできればしたいと回答している。結婚したい理由として、それぞれ複数の理由を挙げたが、全員が共通して「子育て家族」を志向していると語った。

表1 インタビュー協力者について

協力者	年齢(歳)	恋人の有 無	居住形態	職業
A	30	有	1人暮らし	派遣 一般事務
B	26	無	1人暮らし	正規職員 専門職
D	29	無	実家	正規職員 営業(元専門職)
E	30	有	1人暮らし	正規職員 専門職
F	30	有	1人暮らし	正規職員 研究職
I	26	有	1人暮らし	大学院生(正規職員として内定あり)

4 分析と考察

4.1 就労継続を想定する語りから

女性が自身のライフコース上で、結婚や妊娠・出産を経てなお就労の継続を想定することは、先に示したデータからも容易ではない。しかし、本稿で取り上げる調査には、表 1 に示した通り、正規職員かつ専門職で働く女性たちの語りも複数存在する。仕事を決めた際に、すでに結婚後の展望も考慮していたケースもある。以下に具体的に紹介する。

本稿で紹介する 6 名の調査協力者すべてが、結婚後の就労継続を想定していた。そのうち、妊娠・出産後も退職せずに就労を継続するつもりであると語ったのは、D さん、E さん、F さん、I さんであった。

D さんは、姉夫婦の妊娠・出産後の就労をめぐる経過を語る中で、D さん自身は結婚後も妊娠・出産後も「私は絶対働きたい」「働きたい」と語った。

D：私は絶対働きたい、と思いますね。働きたいって。だからその〇〇士（※D さんの持つ資格の職業）って、その点、ずっと働ける仕事だからってことで（この資格を取り、仕事に就いた）。正直言って、みんなもう結婚して子どもいて、まあ病院で大体保育士がついてるんで、そうそう託児保育が絶対ついてるので、そこ預けて、病院は本当にそういう人たちばっかなんで、今。（中略）まだ全然子ども預けられる環境だからきっと、みんなやってるんだと思うんですけどね…。

D さんは現在、民間企業の営業職として働いているが、過去に有資格の専門職に就いており、その職場である病院には「託児保育が絶対ついている」と、環境も整っていることをよく知っていた。ただし、現在働いている民間企業では、「（働きたいことは）絶対無理だと思います」と語った。

D：あ、絶対無理だと思います。X（※D さんの働いている会社）だったら、大丈夫って思うんですけど、でも正直言って、私がやってた営業事務の、事務職なんて、もう若くて、営業さん帰ってきたときに、お帰りのさいって若い子が、言うのが、たぶんいいですよ。年取ってから、居づらくなると思うんですよ。（中略）多分、わかんないんですけど、本当に、30 代後半、40 代っていう人はいなかったし、大体みんな 1 年 2 年で辞めるんですよ。（中略）そうですね…。結婚してる人いなかったですね…。結婚したらみんな辞めるっていうか…。

就労継続が「絶対無理」である理由として、D さんの職場にモデルとなる上司や同僚がいないため、実現困難であると捉えているようであった。「営業の女の子っていうのがまずいなかったから、第一世代だったんで、私たちが」「会社はすごくいい会社だったんで、あの、希望すれば多分やってくれるんですけどね、うん…」と、制度があることは情報として知っていても、それが適用されている例を見たことがなく、適用されるのかどうかについてわからない状況であれば、先ほどの専門職と同様に環境が整っているとは、一個人にとって認識されていないという可能性が伺えた。先に語りの中で登場した病院での就労に

関しては、「みんな（結婚後も仕事を）やってる」と語り、民間企業では「みんな辞める」語ったことは対照的である。

Eさんは、20代前半の頃は結婚後には働きたくなかったこと、25歳くらいまでに結婚して仕事を辞め、30歳頃までに子どもを2人産むことを想定していたと語った。しかし、現在ではそうではないと語り、20代前半の頃の自分を「世間知らずだった」と評価している。

E：そのころは、私結婚したら働きたくなかったので、25までに結婚して、いい人と（笑）結婚して働かないで、で20、30代で二人くらい産みたいとか…なんかそういうのありましたけど…でも変わってきますね。私まだ世間知らずだったと思うんですね、20代前半とかって。なんか…今は、もう社会に出てある程度は…何年か、経ったんで、やっぱり、女性でも働かなくてもいいっていうことはやっぱり、我慢しなければいけないことのほうが多いし、よほどの相手と結婚しないと、なかなか生活も厳しいっていうのもわかるし…。子どもを産むっていうことも、ただ自分がかわいいからほしいっていうそういう軽い気持ちで産めるものじゃないっていうのもだんだんわかってきたし…。うん…。

Eさんは、就労継続することについて、夫婦間の平等性と生活上の経済的側面に言及した。他にも、服を買うことや旅行に行くことなどを、お互いに我慢したくないという表現で、夫婦間の平等性について言及している箇所があった。ここからは、より良い夫婦関係であることのために、就労を継続し、所得を得つづけることが必要であるという認識がみられる。また、生活上の経済的側面については「子どもにつらい思いをさせ」ないために夫婦ともに働き、「余裕のある生活」をしたいと語った。

E：うち甥っ子が未熟児で、結構ちっちゃく産まれたんですよ。で、未だにやっぱり発達とかがやや遅れてて…。で、どこか…腎臓が悪い、ちょっと悪いとか、やっぱりちょっと多少…ちょっと未熟児だと、いろいろ出てくるらしくて、あのしばらくおっきくなるまで。で…なんかそういうのを見てて、やっぱこうほんつとに健康な子が生まれるとは限らないから、そうもって発達障害って言うか、障害のある子が生まれてもぜんぜんおかしくない…わけだし、なんか、そういう子が生まれたときに、自分が果たしてちゃんと育てられるのかなっていうのを…結構考えさせられたっていうのが、あって…。あとは、なんかやっぱり、少子高齢化とかも、病院で働いてるとすごい感じるんで、うーんなんかやっぱり、こう今産んだとして、子どもが、30年40年先、おっきくなって、自分…たちくらいの年齢になったときに、たぶん今の自分たちよりも、さらに苦勞しなきゃいけない、時代を生きなきゃいけない子達になるのかなって思うと、なんか産んでいいのかなと思っちゃうんですよ。なんか結構そう、真剣に、考えちゃうときもあって…。

以上からまとめると、Eさんは、良好な夫婦関係のため、そして子どものために、就労

継続を希望かつ予定するという語りであった。Eさんは、ほかの箇所でも、自分たちの世代よりもこれから生まれてくる子どもの世代が経済的に厳しい環境で生きることや、年金などの社会保障制度についての若年世代の負担増大などを心配しており、Eさん自身が仕事を辞めて無業となり、収入がない状態では子どもの将来にとって良くないと考えている語りが見られる。

E：やっぱり相手もね、ちゃんとした職業でちゃんと年収のある人と、結婚できて、世帯年収でわりと、あるくらい…余裕のある生活ができれば、子ども産んでもいいのかな、と思うんですけど…。そういう相手とめぐり会えなかったら、子どもにっらい思いをさせるのがあるんだったら、ちょっと子ども産んでどうかな、というのがありますね…。

そして、Eさん自身が育った環境をイメージし、モデルとしていることも語りから見られた。「自分はある程度今までそんなに苦労を感じたことなく…、生活できたけど、子どもの時代になったらちょっとどうなるかなって思うと…」と、定位家族をモデルとした語りが見受けられる。

Fさんは、結婚のイメージについて質問した際に、今後の展望を語った。

F：あー、そうですね、基本的には、共働きがいいですね。共働きがよくて、自分が仕事を辞めたくないの、っていうのがあるので、共働きをしてって、で(笑)、子どもは3人欲しくて、みたいなのは…(笑)。うん、そうですね、自分が3人(きょうだい)だったので…。で、うん…。最低条件はそれくらいですかね。

展望は、就労に関する展望と、希望子ども数の二点に言及した。それらの点について、いずれも自身の育った家族がモデルであると語った。Fさん自身がいずれは現在の雇用される就労形態から、自営業を目指したいと展望を語っており、その理由としてFさんの両親が自営業であったことに言及した。

F：親戚が近所にみんな住んでたんで、おばあちゃんに良く預けられたりとか…。いともいっぱいいて、いたので、いつも遊んでたりとか、だから、あんまり、寂しくなくて…。自営業の方が、時間が、自由じゃないですか。子どもの送り迎えとか、あったので、結構、なんか、普通のサラリーマンよりは、家族…といった時間の方が、多かった気が、しますね…。親の会社に、学校帰りに行って、パン食べたりとか(笑)。だから、そうですね…。ゆくゆくは私も自営業とか、独立を、したいなと思っていて、結婚の条件(笑)、条件っていうか、としては、まあそういうのに理解があること…。

以上のように、Fさん自身も両親が自営業で共働きでいても「寂しくな」かったこと、つまり子どもにとって悪い環境ではなかったという点について言及した。これは、親の就労、特に母親が働くことについて、子どもが寂しくないかどうか、子どもにとっての環境の良し悪しを左右すること、そして子どもにとって良い環境であることが担保されてい

るといふ留保をして、自身の就労を正当であると、言い換えれば不当ではないということをも説明している。FさんもEさん同様、自分自身が育った家族をモデルとした展望を持っており、家族と過ごす時間が長くなることがむしろ利点であるとして、将来は自営業で働きたいという展望を語った。「普通のサラリーマン」を対置させた語り、すなわちサラリーマンの夫とその専業主婦の妻という標準的なライフコースを対置させて、それよりもFさんの展望は子どもにとってより良い環境であると語ったことは、興味深い。

Iさんは、現在学生であるが、既に正規雇用での仕事が内定している。結婚や夫婦のイメージに関する質問をした際に、世帯収入と希望子ども数に関する展望を語った。

I: うーんと、なんか、私も働くし、彼も働くし、2人でだから年収一千万くらい、超える家庭を築きたい、みたいな(笑)、そういう感じかな。あと子ども欲しいとか、子ども、自分が3人きょうだいで…の末っ子で生まれたから、なんか子どもは、1人じゃなくていっぱい欲しいなあ、とか…。思ったりは、するかなあ。

そのすぐ後に、希望子ども数と関連させて経済的側面に言及した。

I: (子どもは)3人欲しいなどは思うんですけどでも、どうですかね、お金かかるなあとか、そしたらいっぱい稼がなきゃなあ、とか…。

うちの父親と母親見ると、N県(※Iさんの出身地)でいて、東京に3人とも出てきてて、しかも私立3人入れたんで、なんでなんか、そこまでのお金を、自分が稼げるかっていうとなんか、すごい厳しいなあ…と思って、本当にあー感謝ありがとうございます、みたいな感じなんですけど(笑)。なんか、そういう父、父親と母親になれるのかなあとかいう不安もあるし…。

希望子ども数はIさん自身が育った環境をモデルにしている。そのためには「お金がかかる」と認識しており、両親をモデルとして、自分がそのような親になれるかどうかということをも将来の不安として語った。自身の定位家族をモデルとして実現させたいが、自分の子どもをそのように育てられるのかどうか、という文脈の中に、「いっぱい稼がなきゃなあ」という就労継続が語られる形となった。

4.2 再就職を想定する語りから

再就職を想定していたのは、Aさん、Bさんであった。

Aさんは、現在派遣社員として仕事をしているため、制度上育児休業の取得が難しい立場でもある。Aさん自身は妊娠・出産後の就労継続に関して「その環境があるなら、続ける」と語った。

A: その環境があるなら、続ける。まあなくても、パートには出る、気がする。絶対的に、外との関係を絶っちゃうのは、怖いっていう思いがある。なんかこう、家庭に縛られるじゃないけど、子どもと、家庭と、そこしか知らないと、なんか思い込み激しい人になっちゃういそうな気がして…。(中略) バランス…?かなあ。なんかこ

っちの顔もあって、こっちの顔もあって、その都度違う人がいて、の方がバランスが取れる気がする…。母だけの顔になっちゃうっていうのは、怖い。たぶん息抜きにもなるよね。ここでは私。お母さんじゃなくていいんだ、みたいな。対等に話してくれる人がいるし…。同僚だったり…。

どのような結婚がしたいかについてのイメージを尋ねた際に、「お互いをこう思いあえる関係だったらいいな—とは思う。」と語っており、夫婦関係が良好であるために、就労を継続ないし再就労を希望していることがうかがえる。また別の箇所では、「子どもができて、子どもを育ててから（結婚が）失敗でしたってなっても、不幸になるだけ…」と語り、夫婦関係が良好であることが、子どもの幸せとも結び付けられていることがうかがえた。

Bさんは、結婚後は就労を継続するが、妊娠・出産後はパートでの再就職を希望・予定していると語った。また、希望子ども数は自身が育ったきょうだい構成を参照し、男女一人ずつで二人が希望であるとも語った。「一人は30前に産みたくて、もう一人が31、2、3くらいで」とのことなので、Bさんの語りから察するに、35～40歳以降に再就労することが希望・予定されているとみられる。妊娠・出産後は「働ける間は働きたい」と語ったが、特に年齢やライフステージを特定せずに今後の展望を尋ねた際には、以下のように語った。

B：んー。やっぱ、人生一度しかないんで、人生を楽しんでいきたいって言うのは、常に思っていますね。なので今、独身っていうのを、最大限楽しんでいきたいっていうのは、ありますね。いろんな男の人とも会い、いろんな人とも会い…。

以上のように、仕事と結婚という部分について、他の調査協力者たちほどには言及がなされなかった。

4.3 まとめと考察——いずれも「よき家族」であることが正統なモデルとされる

ここまで、就労継続を希望・予定する語りと再就職を希望・予定する語りをみてきたが、そこから浮き上がってきたのは、自身の育った家族をモデルとし、いわゆる円満な夫婦関係や子どもの幸せがある家族を想定し、そこから逸脱しない範囲での就労、そしてそのモデルや想定をかなえることができる就労を希望ないし予定していると語られた。再就労を希望・予定するAさん、Bさんの方が、自身がどうありたいかという姿勢に言及していたようにも見受けられるが、しかしそれも、夫婦関係や子どもを度外視した発想ではなく、いずれにせよ、本調査の協力者たちからは、結婚や家族と競合するような就労に対する展望は全くされなかった。これらの点については、離婚相談の記事に関する野田の論文でも論じられていた通り、近代家族は部分的に強化さえされている可能性がある（野田 2008）。『子どものため』の内部でしか己の正当化を確保できない」という野田の示唆は、離婚相談の記事に関する分析であったため、「子どものため」のみが登場するが、本研究では未婚女性への結婚に関するインタビューであったため、「子どものため」以外に「夫婦関係のた

め)、つまり仲の良い家族という近代家族の姿が垣間見えるのではないだろうか。インタビューの中には、「子どものためにも良き夫婦関係でいたい」という語りもみられた。「夫婦関係のため」も強引に「子どものため」と解釈するのであれば、夫婦間パートナーシップは子どものいる家族をより良い状態にするための手段であるとみることもできるかもしれない。女性の生き方は、現在においてもなお、良き家族像を逸脱しない範囲で、特に子どもにとって良い母親であることを逸脱しない範囲で、就労継続や再就職の希望ないし予定が語られていた。

本調査において、取り上げた調査協力者たちの語りからは、既存の統計調査による多くの人びとの傾向を探る研究結果から得ることが難しい知見を得ることができたのではないかと考える。同時に、統計調査において過去約 30 年間ほとんど変化がうかがえない女性の結婚や就労に関する意識と行動について、変化しない理由も垣間見えたのではないかと考える。就労継続を希望ないし予定している語りは、定位家族をモデルとしており、母親が就労していた場合は母親をモデルとして語られていた (E さん、F さん)。つまり、女性の結婚や妊娠・出産後の就労については、母親をモデルとしているならば、世代が変化しても、同一の傾向が再生産されている可能性がある。本稿で明らかになったことは、女性にとって結婚や妊娠・出産と就労は競合するものではなく、むしろ結婚や妊娠・出産をより良い形で実現させるために必要であり、あるべき姿であった。無論、それが実現可能かどうかはまた別の話であるが、しかし、就労のために結婚や妊娠・出産を先延ばしにしているとされるような未婚・晩婚化は、ここではみられなかった。興味深いのは、F さんがインタビュー調査の一年ほど前に婚約破棄したという相手の男性が、F さんが転職したことを理由に、結婚を先延ばしにし続け、結局結婚せずに関係が破綻したという以下の語りである。

F: (33 歳の相手の男性が) 35 までには結婚したいって言ってて…直近なんです。

で、すごい言われるんですよ、あの、なんか、女性は 30 過ぎると、妊娠の確率とか落ちるっていうじゃないですか。いや私も、30 とかで、早く結婚したいけど、とか言って…、まあでも (F さんが) 転職したばかりだったんで、やっぱ慣れるまでは、結婚はしないって向こうが言ってて。でもなんか、仕事って、いつまでも落ち着かないと思うんですね。そういうのも含めて、結婚して帳尻を合わせていくものだと思う…思うんで、その辺で、じゃあ結婚する気があるんだったら早くして、そんな子どもがどうのこうのとか言われるくらいだったら、早く産休に入らせるとか (笑)、思ったんですけど、でもなんか、結局なんか、なんだろう、別れた後に、あ、この人は結婚する気がきつとなかったんだって思って、それで、で、あでも全然後悔とか、全くなかったです…。

未婚・晩婚化と言われる女性たちには、相手の男性がおり、男性の意識は統計調査の上でも大きく変更している。結婚という出来事について、女性の生き方や意識が問題視され

る傾向にあるが、今回の調査でみられた女性自身の語りからは、就労継続希望者は極めて家族主義的とも言える姿が浮かび上がってきたことは、特筆すべきことであろう。

5 今後の課題

本稿で取り上げたインタビュー調査は、ごく少数の調査協力者たちの語りであるため、これが現代日本の女性たちの一般的な認識であると論じるつもりは毛頭ない。しかし、就労を継続することを希望ないし予定する未婚女性たちが、ほぼ全員同一のロジックを用いて語ったことは、興味深い結果であった。同一のロジックとは、自身の定位家族をモデルとし、生殖家族のためになるような就労継続を望むという語りである。就労に際して「自己実現」や「社会的成功」は言及されず、されても家族への言及よりも圧倒的に分量が少なかった。再就労を希望する語りについては、Aさんが母親役割だけの自分でいたくないから少なくともパートには出たいと語り、一見自分自身のあり方について言及しているようにみえた。しかしそれは、夫婦仲や家族仲を円満にするためと語られ、やはり結婚や出産後の女性の就労について正当化が確保されるのは、「子どものため」であると改めて裏付ける結果となった。

ただし、本稿で取り上げた調査協力者のほとんどが正規雇用で働く人びとであった。女性の多くは未だ非正規雇用で就労しており、その場合に制度の上で妊娠・出産の際に就労継続が困難である人びとが多く存在する。日本において、結婚適齢期の人びとが結婚に踏み切る要因は、妊娠・出産くらいであると言われている（永田 2002）。子どもを持たない夫婦はまだ少ない。そのため、非正規雇用で働く女性たちは、結婚後の妊娠・出産に際して仕事を辞めざるを得ないため、彼女たちにとって結婚することは近いうちに離職するという意味になり得るだろう。そのような人びとにとって、仕事と結婚は競合している可能性は十分に考えられる。今後は、非正規雇用で就労している結婚適齢期の女性の研究を進めたい。

注

(1) その出来事が事実かどうかは重要ではなく、語り手の用いる論理や文脈を見られる点が重要であると考え（田淵 1998）。

参考文献

国立社会保障・人口問題研究所 2007、「第 13 回出生動向基本調査 わが国独身層の結婚観と家族観」

———2012、「第 14 回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）—第 II 報告一」国立社会保障・人口問題研究所ホームページ（2014 年 4 月 10 日取得、

<http://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/207750.pdf>)

厚生労働省 2013、「平成 25 年人口動態統計月報年計（概数）の概況」

厚生労働省 2015、「第 13 回 二一世紀出生児縦断調査」厚生労働省ホーム・ページ (2016 年 1 月 4 日取得、<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/13/>)

目黒依子、1991、「家族の個人化——家族変動のパラダイム探求——」、『家族社会学研究』(3)、8-15、日本家族社会学会

野田潤、2008、「『子どものため』という語りから見た家族の個人化の検討——離婚相談の分析を通じて（1914～2007）——」、20 (2)、48-59、日本家族社会学会

永田夏来、2002、「夫婦関係にみる「結婚」の意味づけ——妊娠先行型結婚と恋愛結婚の再生産——」、『年報社会学論集』(15)、214-225、関東社会学会

嶋崎尚子、2013、「『人生の多様化』とライフコース——日本における制度化・標準化・個人化」田中洋美・M.ゴツィック・K.岩田ワイケナント 編『ライフコース選択のゆくえ——日本とドイツの仕事・家族・住まい』新曜社、2-22

田淵六郎、1998、「「家族」へのレトリカル・アプローチ——探索的研究（シンポジウム：「核家族論争」と戦後日本の家族社会学）」『家族研究年報』(23)、71-83、家族問題研究会

山田昌弘、1994、『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』、新曜社

大和礼子、2015、「結婚」岩間暁子・大和礼子・田間泰子著『問いからはじめる家族社会学——多様化する家族の包摂に向けて』有斐閣、77-107